第３課　イエスとヨハネの黙示録

【暗唱聖句】

「勝利を得る者を、わたしは自分の座に共に座らせよう。わたしが勝利を得て、わたしの父と共にその玉座に着いたのと同じように」黙示録3:21

【今週のテーマ】

新約聖書と旧約聖書は密接につながっています。黙示録を研究するときには、ダニエル書などと一緒に研究するとより深く理解することができます。そしてその中心には常にイエス・キリストがおられます。今週は黙示録の中のイエスに目をとめます。

【日曜日・黙示録の構造】

ダニエル書にしても、黙示録にしても共通しているのは歴史的な部分と終末的な部分の二つから構成されており、両者は複雑に結びついていることです。そのため聖書の歴史的な出来事を学ぶことによって、それはこれから起こる終末の出来事の洞察を得ることができるのです。

「これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです」第一コリント10:11

聖書の中に記されている様々な教訓に満ちた出来事は、時の終わりに直面しているわたしたちに対する警告であり、わたしたちを戒める前例として起こったのだと聖書は教えています。聖書の出来事を単なる歴史として読み過ごすのではなく、同じことが今も起こりうるのだということを思いながら読み進め、何がいけなかったのか、どうすべきだったのか、そして現代生きているわたしたちはそこから何を学ばなければならないのか、などを考えながら聖書を学んでいくことが重要です。

ここでは、具体的にエジプトを脱出したイスラエルの民の多くが荒れ野で滅びる結果を招いた過ちであった、「悪をむさぼることのないために」「偶像を礼拝しないために」「みだらなことをしないように」「キリストを試みないように」「不平を言わないように」、これらの出来事が記録されているのだとパウロは語っています。

黙示録の構造は現代から見れば歴史的な出来事（過去の出来事）について預言と、これから起こる終末の未来に属す出来事もあります。また同時にその当時の人、つまり黙示録の手紙を受け取った教会の人々に対するメッセージもあります。そのような視点から読むことが大切で、二重預言のような、一つの出来事に絞り切れないものもあります。ざっくりと分けると、11章までが現代から見れば歴史的な出来事、13章以降は終末の出来事、両者をつなぐ12章はその両方を含み、神様とサタンとの大争闘が過去・現在・未来にわたって描かれています。

【月曜日・イエスの描写】

黙示録におけるイエス・キリストの様々な描写を見てみましょう。

「証人、誠実な方、死者の中から最初に復活した方、地上の王たちの支配者、イエス・キリスト…わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方」黙示録1:5

「また生きている者である。一度は死んだが、見よ世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」黙示録1:18

「巻物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、おのおの、竪琴と、香のいっぱい入った金の鉢とを手に持って、小羊の前にひれ伏した。」黙示録5:8

「19:11 そして、わたしは天が開かれているのを見た。すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は、「誠実」および「真実」と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる。19:12 その目は燃え盛る炎のようで、頭には多くの王冠があった…その名は「神の言葉」と呼ばれた…この方の口からは、鋭い剣が出ている。諸国の民をそれで打ち倒すのである。また、自ら鉄の杖で彼らを治める…」黙示録19：11～15

「また、わたしに言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。初めであり、終わりである。渇いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。」黙示録21:6

キーワードを抜き出してみると、「証人」「誠実」「復活」「支配者」「罪からの解放」「永遠」「死と黄泉の鍵を持つ」「子羊」「白い馬」「真実」「正義」「裁く」「戦う」「燃える目」「王冠」「言葉（鋭い剣）」「初めと終わり」「命の水」などがあります。イエス・キリストに対して様々な描写をすることで、イエス・キリストがどのようなお方であるのかをより鮮明にしています。そしてイエス・キリストこそが黙示録の中心であることを印象付けます。黙示録の中心であるということは、過去も現在も未来も、いつの世も、どんな人にとっても中心はイエス・キリストのみということです。

【火曜日・黙示録における聖所という主題】

黙示録には天の聖所の光景が出てきます。地上にあった聖所は天の聖所のひな型であったわけですが、その天の聖所におられるイエス・キリストをヨハネは幻のうちに魅せられたのです。黙示録1:13では「燭台の中央には、人の子のような方がおり、足まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めておられた」と、燭台の間を歩かれるイエス・キリストが描写されています。この燭台は教会のことを表していると黙示録1:20に書かれてあります。

「あなたは、わたしの右の手に七つの星と、七つの金の燭台とを見たが、それらの秘められた意味はこうだ。七つの星は七つの教会の天使たち、七つの燭台は七つの教会である」黙示録1:20

この金の燭台は旧約時代の幕屋、あるいは神殿の聖所における第一の部屋に置かれたものです。ということは、神の教会を天の聖所において、イエス・キリストが守っておられるということです。また、聖所の中は外からの光は入り込めませんでした。その聖所で祭司たちが仕えるためには、金で出来た燭台の光が必要でした。神との親しい交わりに必要なのは、神の光がなければなりません。神の光は光源としての光ではなく、啓示の光、いのちの光、愛の光を意味します。教会はそのような本来、そのような光で満ちているところなのです。

さらに黙示録4章になると、ヨハネは開かれた門が天にあるのを見せられ、その門をくぐるとそこには神の御座がありました。

「その後、わたしが見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパが響くようにわたしに語りかけるのが聞こえた、あの最初の声が言った。「ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう。」わたしは、たちまち“霊”に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた」黙示録4:1，2

御座は神様の聖なる臨在を意味する言葉です。ヨハネには父なる神様へき玉や赤めのうのようであったと描写しており、顔をはっきり見ることはできませんでした。また、「玉座の前には、七つのともし火が燃えていた」（黙示録4:5）と聖霊がおられることがわかります。さらに「屠られたような小羊が立っているのを見た」（黙示録5:6）と、イエス・キリストが屠られた子羊、十字架にかかられたキリストとして登場します。これにより、三位一体の神様が天の聖所におられることがわかります。しかもキリストは犠牲の動物のように描かれていることによって、いま生きているわたしたちにとって、いかに十字架の贖いが重要なのかを伝えてくるのです。

さらに黙示録11:19では、「天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え」と、ヨハネは至聖所に置かれていた契約の箱を目撃します。つまり、そこは天の至聖所であることがわかります。地上にあったものは、すべて天にもあるのを見て、天と地は密接につながっていることがわかるのでした。

【水曜日：黙示録の中のキリスト】

「イエス・キリストの黙示」（黙示録1:1）という黙示録の書き出しの言葉は、イエス・キリストのことを黙示（啓示）している書とも読めますし、イエス・キリストご自身が語（黙示・啓示）った書とも読むことができますが、おそらくどちらも正しいのではないかと思います。黙示と訳すと隠された書という印象を与えますが、実際原語的には啓示と訳すべき言葉で、キリストが最終時代に起こることを明らかになさった書、しかも、その中心はキリストご自身についてのことである、それが黙示録なのです。

　そのような中で、黙示録1:5では、キリストは「地上の王たちの支配者」と描写され、イエス・キリストがすべての最終権限を持っておられることを示されました。また、「御自分の血によって罪から解放してくださった」と、贖い主としてわたしたちを罪から解放し、聖なるものへと作り変えて下さった方であることが宣言されています。このような力強い断定的な言葉によってわたしたちは励まされ、救いの確信が与えられるのです。

そして、そのキリストは「見よ、その方が雲に乗って来られる」（黙示録1:7）と最初に宣言されています。黙示録の結論が最初に書かれてあるわけです。論文の書き方と同様に、最初に結論があり、本論でそれを証明していくような書き方が黙示録でもなされているということです。

【木曜日：黙示録の中のキリスト２】

黙示録1章10節以降、ヨハネはキリストの声を聞き、振り向いてそのお姿を見ます。

「燭台の中央には、人の子のような方がおり、足まで届く衣を着て、胸には金の帯を締めておられた。その頭、その髪の毛は、白い羊毛に似て、雪のように白く、目はまるで燃え盛る炎、足は炉で精錬されたしんちゅうのように輝き、声は大水のとどろきのようであった。右の手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出て、顔は強く照り輝く太陽のようであった」黙示録1:13～16

この圧倒的な神々しいお姿を見てヨハネは圧倒され、倒れてしまいます。「わたしは、その方を見ると、その足もとに倒れて、死んだようになった」黙示録1:17

優しい愛のイエス様というイメージがありますが、しかし、天における主のお姿は人間とは比べ物にならない、圧倒的に聖なる方なのです。イエス・キリストはすぐに右手をヨハネの上に置いて言われます。「恐れるな。わたしは最初の者にして最後の者」黙示録1:17

「最初であり、最後である」という表現が黙示録の中に繰り返し出てきますが、始まりも終わりもすべてイエス・キリストのみ手の中にあります。人間はまるで自分で歴史を動かしているかのような勘違いすることを許されないのです。「また生きている者である。一度は死んだが、見よ、世々限りなく生きて、死と陰府の鍵を持っている」黙示録1:18

さらにキリストは死と陰府の鍵を持っていると語ることで、永遠の命はキリストの中にあることを示されます。

黙示録22:12、13で「見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる。わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである」と、重要なメッセージを繰り返します。このキリストからのメッセージを受け取り、単純に信じるのが信仰者です。